

古文の主語・会話をとらえよう

※古文の読み仮名は現代仮名遣いです。

1 要点 チェック

主語(動作主)をとらえよう。

主語は動作より前にあることが多い。

例 鳩つばきこずよりこれを見て……

『伊曾保物語』より

問題 一の動作主を一字で書き抜きなさい。

* 蛩はなの多く飛びちがひたる。

『枕草子』より

□

2 会話をとらえよう。

会話は「」の前と後の言葉に注目する。

例 翁おきな言ふやう、「我、朝ごと……人なめり」とて、

直前は、(人物)、(人物)いはくなど、ととてなど、……

『竹取物語』より

問題 次の古文から会話を十字で書き抜きなさい。

* 女、答へていはく、これは、蓬萊ほうらいの山なりと答ふ。

女性は答へて、「これは、蓬萊の山なりと言いました。」

『竹取物語』より

□

1 次の一の動作主(行った人)を、指定の字数で書き抜きなさい。

(1) 与よ一、鎬なごを取つてつがひ、よつ引いてひやうど放つ。

ガイド p.34 10点×2

(2) ある人、竿さおの先に鳥もちを付けて、かの鳩はとをささむとす。

ある人が、竿の先に鳥もちを付けて、その鳩を捕らえようとする。

□ (三字)

2 次の古文から会話を探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

かぐや姫、物知らぬこと、なのたまひそとて、かぐや姫は、情理のわからないことを、おつしやらないでくださいと言つて、いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。たいそもの静かに、帝にお手紙を差し上げなごる。

ガイド p.34 10点×2

□

「かぐや姫」が言つた言葉をとらえよう。会話文の終わりには「ととて」がつくよ。



下段出典 大問①『平家物語』、(2)『伊曾保物語』、大問②『竹取物語』より

- 4 かちの高い宝石。 5 鏡でかおを見る。 6 朝早くおきる。

解答・解説集 p.18

Table with columns: 名前, 年, 組, 番, 合計得点

B とりくもう

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

『醒睡笑』より

(ある道心者が民に仏法の話をしたところ、終わっても座ったままの者がいた。)

* 法談は過ぎてても、終に座を立たぬ法話が終つても、そのまま座を立たない

男ありき。道心者の老したるが、あながちに感じ思ふ。一句の聴聞を

のぞむ人さへ稀なるに、ありがたき聞(う)つする人さへ少ないのに、珍しく立派な

こころざしかな。呼び入て茶をも心かげの人である。呼び入れて茶をも

まみらせんやと、かれにうかがひたさしあげようと、その男にお尋ねすると

れば、あまり長談義に、しびりがきれば、あまりに話が長いのでしびれて

て、立たれぬはというた。立つことができないのですと言つた。

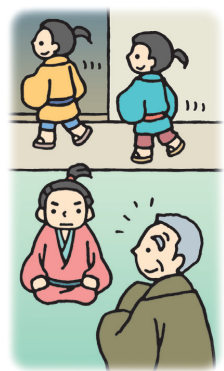
* 道心者|| 仏道の信仰者。ここでは仏法の話をした人。

* 法談|| 仏法の話。法話。

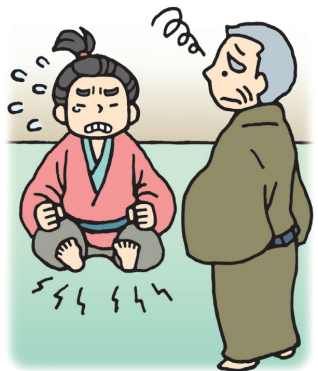


読むナビ 内容を絵で理解しよう。

終わつても一人だけ残っていることに道心者が気づく。



道心者が声をかけるとその人は……



足がしびれて立てないと答えた。

1 ①「感じ思ふ」、③「いうた」の動作主(行った人)を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ガイド p.34 10点×2

- ア 道心者 ① □ ③ □
イ 座を立たぬ男
ウ 作者

ヒント ①は感激した人、③は最後に話した人であることから考えよう。

2 「かれ」の言つた言葉を古文中から二十一字で探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

ガイド p.34 10点×2

□

ヒント 「かれ」とは「座を立たぬ男」のこと。

3 この話の内容について、次のようにまとめた。空欄に当てはまる言葉を、古文中から五字と三字で書き抜きなさい。

ガイド p.34 10点×2

* 道心者は、男が法話について考え込んでいるのだと思い、男の立派な □ に感激していたが、実際は、 □

のために、男は足がしびれて立てなくなっていた。

道心者は、男が自分の話を真剣に聞いて考えてくれたのだと誤解したんだ。本当は足がしびれて立てなかったという笑い話だよ。



※文字数指定のあるものは、句読点や記号も一字一文字考えなさい。

- 35 入試に出た漢字 ① 家と駅をおうふくする。 ② えいがを作る仕事。 ③ うちゅうに行きたい。

古文の主語・会話をとらえよう

要点 チェック

主語(動作主)をとらえよう。主語は動作より前にあることが多い。

例 鳩こずあよりこれを見て……

「伊賀保物語」より

問題 ーの動作主を一字で書き抜きなさい。

* 螢の多く飛びちがひたる。

「枕草子」より

2 会話文をとらえよう。会話文は「」の前と後の言葉に注目する。

例 翁言ふやう、「我、朝ごと……人なめり」とて、直前は、「人物、／＼人物いはいくなど」と／＼とてな……

問題 次の古文から会話文を十字で書き抜きなさい。

* 女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり」と答ふ。女性に答へて、

これは、蓬萊の山なり

「竹取物語」より

動作主には、「は」「や」「が」がついていないこともあります。

解答 名前

合言

1 次のーの動作主を行った人を、指定の字数で書き抜きなさい。

(1) 与一 鐘を取つてがひ、よつ引いてひやうど放つ。

与一は、鐘を取つて言に「つがえ、引き絞つてひやうど放つ。」

ガイドp.34 10点×2

(2) ある人 竿の先に鳥もちを付けて、かの鳩をささむとす。

ある人が、竿の先に鳥もちを付けて、その鳩を挿さようとする。

(三字) ある人

2 次の古文から会話文を探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

かぐや姫、物知らぬこと、なたまひそて、かぐや姫は、情理のわからぬことを、おつちやならいでくたさいと言つて、

いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。たいそもの静かに、帝にお手紙を差し上げなされる。

物知ら まひそ

「かぐや姫」が言った言葉をとらえよう。会話文の終わりには、「て」「に」「が」がつくよ。

下段出典 大問①(1)「平家物語」、大問②「伊賀保物語」、大問③「竹取物語」より

登場人物は、話をした道心者と「座を立たぬ男」の二人。③は「足が」しびれて立てない」と答えた男です。

男の様子を見て道心者はどう思ったか、また真相はどうだったのか、読み取りましょう。

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

(ある道心者が民に仏法の話をしたころ、終わっても座つたままの者がいた。)

* 法談は過ぎてても、法談が終わつても、

男ありき。道心者の老したるが、あ

ながちに感じ思ふ。一句の聴聞を

のぞむ人々へ稀なるに、ありがたき

まゐらせんやと、かれにうかがひた

れば、あまり長談義に、しびりかき

て、立たれぬはと

* 道心者「仏道の信仰者、ここでは仏法の話をした人。*

* 法談「仏法の話。法話。*



「醒睡笑」より 内容を線で読み取り、内容を理解しよう。



道心者が声をかけるとその人は……



足がしびれて立てないと答えた。

1 「感じ思ふ」、③「いうた」の動作主(行った人)を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 道心者 イ 座を立たぬ男

①は感激した人、③は最後に話した人であることから考えよう。

2 「かれ」の言った言葉を古文中から二十一字で探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

あまり れぬは

「かれ」とは「座を立たぬ男」のこと。

3 この話の内容について、次のようにまとめた。空欄に当てはまる言葉を、古文中から五字と三字で書き抜きなさい。

道心者は、男が法話について考え込んでいるのだと思い、男の立派な「ころざし」に感激していたが、実際は、

長談義 のために、男は足がしびれて立てなくなっていた。

道心者は、男が自分の話を真剣に聞いて考えてくれたのだと誤解したんだ。本当は足がしびれて立てなかつたという笑い話だよ。

道心者は男の立派な心かげに感激したのですが、男は長話のために足がしびれて立てなかつたのです。